

ホテルのバーで石田衣良さんと読書会——上質な読書の時間を堪能

毎回ゲストとして参加する作家とともに、電子書籍片手に読書を楽しむ読書会。2月24日には、東京・お台場のホテル「グランパシフィックLE DAIBA」に石田衣良さんを迎え、読書会を開催しました。6回目となる今回は、これまでと趣向を変え、会場を書店からホテルのバーへ移して実施しました。

ソニーの電子書籍ストア「Reader™Store」の店長・加藤樹忠より電子書籍専用端末「Reader」についての説明があった後、ゲストの石田衣良さんと進行役の幅允孝さん（ブックディレクター）が登場。

「この読書会は今年の夏から定期的に行っています。読書というと、家で一人静かにするものというイメージがありますが、今日はここにいる皆さんで思ったことや感じたことをシェアしながら、にぎやかに一風変わった読書と一緒に楽しみたいと思います」（幅さん）

ホテルのバーでの読書会ということで、石田衣良さんにちなんだオリジナルカクテルも用意。参加者には石田さんが「ブルーウエスト」と名付けた爽やかなブルーのカクテルがふるまわれ「乾杯」。リラックスした雰囲気の中、読書会はスタートしました。



今回、課題図書に選ばれたのは、石田さんの代表作である「池袋ウエストゲートパーク」シリーズの『ドラゴン・ティアーズ』。石田さんは同シリーズを既に10作品執筆し、スピンオフ作品も手掛けてきました。しかし、石田さん自身は、デビュー作である「池袋ウエストゲートパーク」がここまで長期にわたり連載されるとは思わなかったそうです。



「若い頃は文章を書く作業は全く苦ではありませんでした。小説を書くということは、空気を手で掴んでそこに何か形あるものを創り出すような仕事だと思っています。でも、だんだん年をとると、その何かを掴む握力が弱くなってくるんです（笑）」と、若き日と比べての苦労も冗談交じりに披露。

続いて、シリーズ9作目の『ドラゴン・ティアーズ』を石田さんが朗読。途中、登場人物の歯の浮くような台詞に、「僕もこんなことを女性に言ってみたいですね」と石田さん。会場からは笑い声が上がり、石田さんが読み終わるとあたたかい拍手で包まれました。

同作品のテーマは、社会の誰からも認知されず大衆に埋もれて生きる多くの「透明人間」。石田さん曰く、自身が大学卒業後、地下鉄の工事現場でアルバイト生活を送っていた頃の経験やイメージが色濃く出た作品とのこと。

「今はこんな風にスーツを着て大勢の前で話したり、テレビに出たりしていますけど、僕にとってその姿は幻のようなもの。結局、ヘルメットを被って肉体労働をしていたあの頃のように、“不便であり豊かではない”とい

った一見マイナスな世界の方が僕は好き。だからこそ、透明人間である大多数の人たちにシンパシーを感じ、彼らへの賛歌として筆を執ったのがこの『ドラゴン・ティアーズ』でした」と語っていただきました。

続いて話題は電子書籍へ。石田さんは、紙の本と電子書籍それぞれにメリットがあり、課題があるので、その違いを分かっていることがまず大切だと言います。

「紙の本でしか補えない要素も少なくないですし、電子書籍にはまだまだ課題があるかもしれません。ですが、問題なのは本に全く触れない人が昔に比べ多くなっていることだと思うんです。作家の私としては、文章が読み手の心に刺さってしまえばどんなメディアでも構わない。本を読むという行為によって、毎日の生活に何かしらの変化が見つかると思っています」（石田さん）



イベントでは、参加者から直接作品の感想を伝えたり、質問したりする機会も設けられました。「石田さんの作品には街を意識した作品が多いが、それらの街のこういったところに引かれているのか」という質問には、「作品で登場する街は、以前住んでいた場所や、よく遊んでいた街が舞台として取り上げられている」とのこと。特に「東京はバラバラな街が一つに集まっているという感じがします。街が一個一個の国であるかのようです。そんな雑踏の中に紛れ込める、カオスな東京が好き」と石田さん。

また、「『池袋ウエストゲートパーク』という長編の連載を続ける中で書き直したいと思うことはないのか」といった質問には、「基本、自分の書いた文章を書き直したりすることはありません。はじめに選んだ言葉が一番人間らしい表情をしていると思うんです。もちろん文章のリズムや物語の流れが崩れていることもあります。けれど、それも味なんです」と、ご自身の小説を書くスタイルやこだわりについても語っていただきました。

読書会には関西から駆けつけた参加者もあり、石田さんのファンは直接本人と交流できたことに「お会いできてうれしかった」と喜びを囁みしめていました。

